

1

January 2006  
No.272

NIKKEI コンピュータ技術の真髓を問う

BYTE



[特集]

本誌記事に見る

コンピューティングの21年

[技術の真髓]

- ①ビバ! 動的言語
- ②生体認証が進むべき道

[青木淳のプログラマ道場]  
分類と整理, 多相

[天外伺朗の悠遊説法]  
終わりを経験することで  
人は成長する

パソコン伝道師

人工知能が花開く時代が来る

尚美学園大学芸術情報学部 教授 西和彦氏



1970年代末からNECのPC-8001、沖電気工業のif800、日立製作所のベーシックマスター-L3、米IBM社のIBM PCの開発に携わった。その後、京セラと共同でNECにOEM供給したPC-8201を開発した。このマシンは米Tandy社からTRS-80 model 100、伊Olivetti社からM-100という名前で発売された。

米Microsoft社を辞めた後、MicrosoftのOSが最も高速に動くマイクロプロセッサを作ろうと考え、米Intel社の互換チップを設計していた米NexGen社に投資し開発を成功させた。この技術は米AMD社のマイクロ

プロセッサAthlonの原型になる。このほか、CD-ROM1枚に74分の映像データが入るMPEG-1開発の立ち上げに参加した。

自分が面白いのではないかと思えることをどんどんやっていけば、次のアイデアが生まれてくる。実現したい世界があったら、自分で手を動かして作り上げる。そんな人材がこれから一層求められるのだと思う。

パソコンではまだまだやれることがある。例えば、人工知能だ。誰も言わないが、Googleは世界で初めて人工知能をお金にした会社だと思う。将来の予測は難しいが、2012年には自動翻訳システムが出来上がってい

るのではないだろうか。どんなページでも閲覧者に最適な言語に翻訳する。そうなれば、地球の裏側の話題すら、直接知ることができる。

また10年ももしないうちに、携帯電話がノートパソコンに取って代わるだろう。今の携帯電話の液晶の解像度はQVGA(320×240ドット)だが6年後にはSVGA(800×600ドット)にはなっている。このとき、パソコンを使う理由は少なくなるだろう。(談)

2007年 iPhone

度外視で薄さと軽さにこだわったB5ノート「PCG-X505」を投入(写真19)。内蔵部品の重なりを徹底的に排除して薄さ9.7mm、789gを達成した。

2003年～

妥協のないノートパソコン作り始動

大きな液晶を備え、軽薄化したノートはデスクトップ並みに使い勝手が良いかといえばそうではなかった。まず、CD-

ROMをはじめとする光ドライブがないし、バッテリー駆動時間が3時間程度と短かった。ところが2003年から様相が変わる。駆動時間が長く、光学ドライブも備え、しかも軽いノートが登場し始めた。

2003年3月にソニーが発表した「バイオノートZ」は上のようなコンセプトを体現した機種だ。ディスプレイは1400×1050ドット、14.1インチの液晶、CD-

RW/DVD-ROMドライブを備え、バッテリー駆動時間は4～7時間である。重さは2.1kg。

松下電器産業も2003年6月に、CD-RW/DVD-ROMドライブと12.1インチの液晶を備えながら、1.39kgの「Let's NOTE LIGHT W2」を発売した(写真20)。現行製品(2005年12月時点)の「W4」は1.19kg。内蔵バッテリーで8時間動作する。(中道 理)

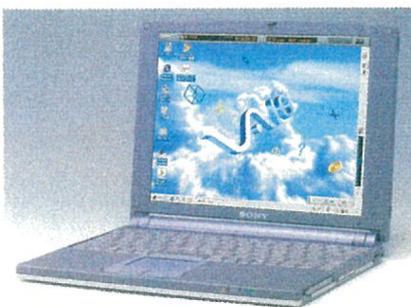


写真18 ソニーの「PCG-505」

軽薄ノートの先駆けとなった。B5ファイルサイズで1.35g、厚さ約2.4mmのノートパソコン。光学ドライブは搭載しない。

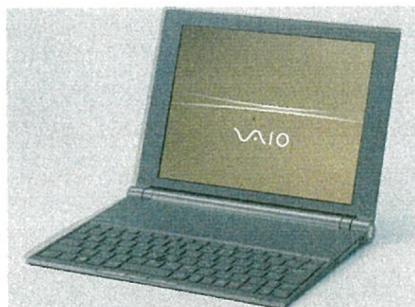


写真19 ソニーの「PCG-X505」

最薄部で9.7mm、重さ785gもB5ファイルサイズ・ノート。コスト度外視で徹底的に薄さと軽さを追求した。価格は35万円と高い。



写真20 松下電器産業の「Let's Note LIGHT W2」

光学マルチドライブを搭載しながら1.39kgと軽い。バッテリー駆動時間は約3.5時間。